

「ずっと一緒にいませんか？」

多分、今から、五年前の話だ。

社会人も二年目になったとき、去年は帰らなかつた実家に帰ろうと思った。

年末休みを少し多めにとつて、ゆっくりと帰省し、あの何も無い島で、積本の数々を消化するのも有意義な休日の計画だろうと、残業続きの寝不足の頭で、満員電車で揺られながら思いついた。それはとても名案な気がして、黛は電車を降りると直ぐに実家に電話を入れた。「今年は帰るから」それだけ伝えると電話を切り、狭くてボロいアパートを指した。会社から少し離れた場所に借りているのは、恋人の学校の近くだからだ。恋人の卒業と共に三月末で引き払う予定のアパートも、段々その期日が近づいてくると寂しいものがあつた。

冷えた冬の空気に頬を赤く染めながら、寂れた住宅街を抜ける。自分のアパートに着きドアを開けると「おかえりなさい」と赤司が笑う。いつもの光景だ。ドアが開いた瞬間に、柔らかく自分を包む暖かい空気が好きだった。

玄関ドアを閉めれば、夕飯の匂いがした。もう随分遅い時間なのに、赤司は食わずに待っていてくれたのだろうか。

彼の作った薄い味噌汁を飲んで、そのまま彼を抱いて眠ると、不思議と次の日も仕事を頑張ろうと思えるのだから、自分は案外簡単な生き物なのだと思う。

「今年の年末は、黛さんはどうすごすんですか？」

玄関先にある風呂場の脱衣所で、黛は満員電車の中で移つたアルコールと煙草の臭いに塗れた服を、乱暴に洗濯機に突っ込みながら「え？」と聞き返す。

赤司は、同じ言葉をもう一度繰り返して行つた。今年の年末はどう過ごすのか。黛は、振り返り「帰省する予定だけ」と返事する。さつき連絡をしたばかりなので、何とタイムリーな質問だろうと少し驚いた。

「……帰省するんですか」

「ああ、今年はな。去年帰らなかつたし」

「そうですか」

「なんで？ お前、一回もそんなこときいたこと無かつたじゃん」

赤司の家は、黛が想像できないほど大きな家なので、親族の集まりやら会合やらで年末年始はやたらと忙しいらしく、殆ど一緒に過ごすことはなかつた。こんな風に予定を尋ねられたのは初めてだ。

「いえ、今年は、少し時間が出来て」

「……どういう意味？」

「毎年、年末は親族の集まりがあるんですが、今年は父が仕事の都合で海外に居るので、俺も行かなくてもよくなりまして」

「代理とかで行って言われねえの？」

「大学四年生って、色々と免許符に使えるので」

そう言っただけで赤司はくすりと笑い肩を竦めた。可愛い。思はず頬を緩めそうになる。赤司はそんな赤司の反応に気付かない様子で「でも」と言っただけで、続けた。

「毎年、そうやって過ごしていたので、いざ行かなくていいってなると、どうにもすることが思いつかずに」

「それで俺に声をかけたのか」

「はい」

申し訳なさそうに微笑む赤司は、黛に部屋着の一式を渡しながら「でも、ご実家に帰るのでしたら、気にしないでください」と言った。

黛は何か言おうとして、結局何も言えない儘、とりあえず煙草とアルコールの匂いを落とすために風呂に入った。

湯船にはお湯がはってある。金曜日はいつもそうだ。体を流し、湯につかりながら赤司の言葉を反芻した。年末はどう過ごすんですか。そう言った時の赤司の顔を思い出そうとしたけれど、疲れで、ふわふわした頭はそれが上手

できないなかった。

湯船に口元まで浸かり、足を延ばして、黛はぶくぶくと息

を吐いた。

ため息のような深呼吸のような中途半端な吐息は、誰にも聞かれずに、ふっと途切れる。

風呂から出ると赤司はテレビを見ていた。最近毎週金曜日に見ていると言っていた謎の恋愛ドラマだった。確かタイトルは『ずっと一緒にいませんか』だっただろうか。ライトノベル出身の作家が書いた一般向けの恋愛小説が原作だと聞いていたので、タイトルだけは何故か覚えていた。

放送時間は過ぎてはいるはずだから、録画でも見ているのだろうか。赤司の趣味も謎が多い。

黛は赤司の背中を見ながら冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターを二本取り出し、赤司の方に行くと、一本を彼が肘をついているローテーブルの上に置いた。

自分は傍にあるベットの上に腰掛け、ペットボトルの蓋をあける。

水を飲むと、赤司も自分の分の水を飲んでいようだった。ドラマはもう終盤らしく、何やら今週の山場を迎えているらしかった。大学生と社会人の恋愛ものだと以前赤司が言っていた。自分と赤司のようだと思えたのを思い出す。

赤司はドラマに見入っているようだった。

話かけるのも戸惑われて、黛は一瞬思索した後「話しかけても良いか」と尋ねた。

「ええ、どうぞ」

「ドラマはいいのか？」

「別に、話をしていても見られますよ」

そうか、頭の良いやつは違うな。

眩きながら、黛はペットロボットの蓋を閉めて、ベットに寝転んだ。ドラマの中ではヒロインが泣いていた。何故泣いているのか理由は分からないが、赤司がじつと見入っているところを見ると、きつと切ない事情があるらしい。興味も無いけれど。

「年末の話だけ」

「ああ、まだ続いていたんですね」

「……お前が言い出したんだろう」

「気にしないでくださいって言いましたよ」

赤司の声は平坦で、何の感情も籠っていないように聞こえる。胡散臭い優しさも、あからさまな敵意も、それから子供のような嫉妬も。

赤司の背中をベットの上で横になりながら見つめ、黛は深くため息を吐いた。

二つも年下の恋人が、年下らしくなる瞬間と言うのは中々可愛い、少々扱いに困ってしまうのも事実だ。

「面倒なやつ」

ぼつりと零すと、赤司は何も言わずに黙り込んだ。

ドラマはもう殆ど終わっているようで、エンドロールが流

れ始めている。後は次回予告と、あるのかないのか分からない最後のパートを見て、お仕舞だ。

黛は、ベットから起き上がり、その下に座っている赤司の隣にそつと腰を下ろした。

覗き込むように彼を見ると、眉をひそめて、じつと押し黙っている。怒っているような、悲しんでいるような、妙な表情だった。

「……馬鹿だな、お前」

くすりと笑ってそう言えば、赤司は一度唇を噛んで悔しそうに「貴方よりは、賢いですよ」と言った。

「まあ、そりやそうだけど」

「……貴方は意地が悪い」

「そんなこと、高校の時から知ってただろ」

「知りませんよ。全然、知りません」

「嘘吐け」

黛が赤司の肩にそつと自分の肩をぶつけると、赤司は困ったように眉を顰め、俯いて、そのまま小さな声で「まゆずみさん」と名前を呼んだ。

その声に、何とも言えない気持ちになった。

赤司の事を、可愛いと思う。それから同時に、憎いとも思う。きつとこの想いに明確な言葉をつけるのは、黛よりもずっと赤司の方が上手いのに、いつも、彼はいざという時に、黛にその全てを押し付ける。

黛は、ゆっくりと息を吐くと、俯いている赤司の顔を覗き込み、そつと彼の唇にキスをした。

赤司は、一度驚いたように目を大きく見開き、黛の肩にそつと手を置くと、それからすぐに、誘うように、僅かに唇を開いた。

隙間に、舌を差し込む。

赤司の舌に自分のそれを絡めると、頭が沸騰する程、興奮する。

「……赤司」

「黛さん、ねえ、明日休みなんですすよね？」

熱のこもった声で名前を呼べば、さらに欲の伴った声が、黛を誘った。

赤司の手がそつと黛の首の後ろに回る。

そのままゆっくりと引き寄せられて、深く唇を重ねれば、さつきまでの不機嫌はどこ吹く風で、赤司はまるで悪い女のように楽しげに口角を上げて、笑った。

「休みだけど」

「なら……ねえ？」

この男にこんな笑い方を教えたのは誰だ？ 自分だと思つと、背骨が震えるほど嬉しい。

「……つてか、待つて。まだ、話の続きがあるんだつて」
思わず流されそうになつた黛は、赤司が背中を預けているベットの縁に手を置いて、自分の熱を落ち着かせるように

深い息を吐いた。

赤司は不満そうに「ええ……」と唇を尖らせている。

「俺には無いです」

「いや、無いこと無いんだつて」

「だつて年末のお話でしょう」

「そうだよ」

「年末に帰るつてもう、黛さん、ご家族に連絡しているでしょう？」

「してるけど」

正確にはさつきしたばかりだけれど。そんなことを赤司に言つても意味は無いと、黛は経験上知つている。

「ならいいです、本当に。俺の為に、帰省しないとか絶対やめてください」

赤司はそう言つて、また黛の唇にそつとキスをした。それを何度も繰り返す。力技で、この話を有耶無耶にしようとしてるのが分かつて、黛は少しだけ腹が立った。赤司が黛の唇内に舌をいれた。上顎をべろりと舐められ、快感が脳を揺らしたけれど、反応をしないでいると、そのうち諦めたのか、赤司はそつと唇を離した。

「……したくないんですか？」

「したいけど」

「なら、何故？」

「お前が、話聞く気が無いのがムカつくから」

「……ないことないですよ」

「ないことないことないだろうが。ってか、そもそも体使
つて黙らそうとしてるのが嫌だ」

そんな馬鹿な真似はするな。

黛がそつと赤司から離れると、彼は眉を顰めながら「そんな
なことしていません」と言った。

どうだかな、と黛は肩を竦め、そうして赤司から少しだけ
距離を置くと、傍にあつたどちらのものか分からないペッ
トボトルの蓋を開けて、一気に飲み干す。どうにか熱を納
めなければと、黛のほうも必死なのだ。

「帰省の話だけど、お前は俺が、お前の為に帰省しないの
が嫌だつて言うけどな……そんなことする気は微塵も無い
からな」

嘘だ。本当は少しだけ考えた。赤司が寂しいなら別に今年
帰らなくてもいいんじゃないかと、風呂の中で何度も思っ
た、でも。

「なら、もうそれでいいじゃないですか……」

赤司がうんざりした様子で言った。ならもうこの話はお仕
舞。これ以上は聞きたくないと、勝手に完結させるのは悪
い癖だと思う。良くも悪くも、黛と赤司は似ている。だか
らこそ、腹立たしく感じることもあるのだ。

「お前、年末は暇なんだよな」

「ええ、そう言っています」

「急に呼び出されることは？」

「あつても、卒業論文が忙しいと言ひ張るので」

「本当に、暇なんだな」

「しつこいですね、貴方には関係ない話でしょう」

「俺の実家に、一緒に帰るか？」

「……………え？」

赤司の、鬱陶しそうな表情が、段々と間の抜けたそれに代
わつて行く様は、中々見ごたえがあつた。

「え」と短く呟いた後は、はくはくと口を開いては閉じを
繰り返して、何か言おうとしているのに、結局何も言葉に
ならない様子で、彼は、その後は一切話すことをやめて黙
り込んだ。

まさか予想すらしていなかったと言う反応だ。

さつきまで腹が立っていたことの全てが、黛の中でどうで
もよくなる。こんなに面白い反応を見られるのなら、なん
だつていいだろうと本気で思った。

「別に、いいだろ。暇なんだつたら」

「でも、そんな、急に」

「田舎の家だから無駄に広いんだ。お前ひとり泊まりに來
ても、困らねえよ」

「でも、だって」

「嫌ならいいけど」

「嫌ではないです！」

赤司がぎゅっと黨の袖を掴んだ。

それを見て黨はにやりと笑う。彼が暇で嫌ではないと言うのなら、俄然、行かない理由は無いだろう。赤司は一瞬しまったと言う表情を浮かべたけれど、その後は諦めたように、何も言わなかった。

それを伺うように見ながら黨は「なら決定だな」と赤司の手を握る。

「親に連絡しとくから」

「……」迷惑でなければ

「別に、迷惑じゃねえよ」

お前みたいな小さいやつが一人増えた所で、何も迷惑なんて無いよと言えば、赤司は黨の頬を掴って「小さくないですよ」と怒った。

馬鹿らしい睦み合いだ。きつととても恥ずかしい。

それでもなんだか心地くて、黨は珍しく声を上げて笑った。

赤司が困ったように眉を顰める。

それを見ながらあんまりの愛しさに抱きしめれば、赤司は逃げることもせずに、黨の背中にそっと手を回した。

結局帰省は、黨の年末休みの初日の夜からに決まった。

赤司が行くと決まった日の翌日に、彼の隣で実家に連絡すれば二つ返事で許可が下りた。

「別にいいけれど、千尋にも、後輩なんていたのね」なんて運動部の息子に失礼な台詞を吐いた母親に舌打ちをして、そのまま赤司に伝えれば、彼は瞬きをしながら「お世話になります」とたどたどしい声で言った。

なんだか嫁に来るようだなと思いつながら、黨は、それからの日々を労働にいそしんだ。

船の出航時間は、きつちりきつかり決まっていた遅刻は厳禁だ。仕事を長引かせないためにも、赤司と実家に帰るためにも、それから毎日、夜は寝ずに仕事をした。

もう絶対に、その日は早く帰るのだと決意を固めて、前々から予防線も張り、仕事にミスがないか何度も何度も入念にチェックをしたのに、当日は結局ギリギリまで残業をして、港に出発時刻の十分前に到着した。

タクシーから降りて、思い出したように急いで携帯を確認すれば「着きました」という赤司からの連絡が既に二十分も前から入っていることに気付いた。タクシーつかまえるのに必死だったうえに、あまり乗らないタクシーに興奮していたせいで携帯を確認することをすっかり忘れていた。失態だった。

舌打ちをしてきよろきよろと辺りを見渡せば、防寒具を身にまとい、少し着ぶくれた赤司が、ぼつんと独りで立っているのが見えた。

赤い髪がニット帽の下で目立たない。

まるでスキーでも行くような風貌だ。

思わず笑うと、黛に気付いたのが、赤司が「黛さん」と名前を呼んで小さく手を振った。

「間に合ったんですね」

「ギリギリ……つてか何？ お前ちよつと太り過ぎじゃない？」

「太ってません」

「いやぶくぶくしてるじゃん」

「夜中船に乗っていると聞いたので、寒いかかと」

「まあ、さみいけど」

そこまですではないんじゃないか。

そう思ったけれど皆まで言わずに、とりあえず二人で船に乗り込んだ。

赤司は船で移動するのは久々らしく、何やら妙に楽しげだった。着込んでいたコートはやはり熱くなったのか、船の中で脱いで、赤司は早々にデッキに出たがったので着いて行った。

暗い海は、ただただ反射する光の無い大量の水だ。

眺めていても楽しいものではないと思うのに、それでも、冷たい風に肌を真っ赤にして、鼻水を啜っている赤司を見ているのは、別に何でもない事のはずなのに楽しかった。

目的地に着くまで六時間半。その日は晴れていて、波も随分と穏やかで、船旅に何も不安は感じない。仕事で疲れて

いること以外は、何も問題が無かった。最高とは言わないけれど、頗る良好だと思った。幸先がいい。何より赤司が楽しそうなのが、楽しかった。

結局三十分程赤司に付き合った。寒さを限界に感じた黛は、赤司の頬に触れ、ひんやりと冷えていることを確認すると船内に戻ろうと声をかける。

赤司は名残惜しそうに、デッキから船内に戻り、椅子に座ると、着てきていた過剰な防寒具を口元までかけて、まるで電源を切ったかのように眠った。

黛は暗くなった船内で、ぼんやりと赤司の横顔を眺めた。そうしていると、そのうちに、自然に眠りに落ちていて、目が覚めれば、朝だった。

冬の六時はまだ暗い。

妙に寝不足な黛とは違い、赤司はもっぱら元気なようです取り軽く港に降りて、それから深呼吸を何度か繰り返していた。冷たい空気が肺に入って痛そうに眉をしかめる。

少し咳込む赤司に「馬鹿」と声をかけると、赤司は恥ずかしそうに笑った。

「思ったより、冷たくて」

「朝と夜はアホ程冷えるからな、気を付けろよ」

目頭をぐいぐいと乱暴に押さえ、肩の凝りを解消するように回すと、凝り固まった筋肉がぼきぼきと音を鳴らす。荷

物を抱え、黛が歩きだそうとすると、未だに赤司が立ち止まっていることに気付いき、振り返る。

「おい、赤司」

早く行こう、と続けるはずの言葉を思わずこくりと呑み込んだ。赤司は立ち止まり、じつと海を眺めていた。僅かに白んだ空に照らされた冬の青くて暗い海を眺め、白い息を吐き、幸せそうに、目を細めている。

彼の傍に戻り、そつと隣に立つと、赤司がゆつくりと「綺麗ですね」と呟いた。そうして黛を見上げると、また目を細めて笑う。

「東京の海とは、比べ物にならない」

「比べてほしくないからな」

天と地ほどの差だ。黛が肩を竦めれば、赤司はそうですね、とまた白い息を吐いて、返事をし、続けた。

「黛さん、こんな海を見て過ごしたんですね」

どこか、遠い声だった。

「……中学生までな」

「海って、青いんですね」

「……すげえ、テンプレな台詞だな」

黛が茶化すように言えば「何かフラグ立ちましたか？」と赤司が微笑みながら言った。

全く本当に変な言葉ばかり覚えるのだから。自分の事を棚に上げながら、黛が笑う。

白んだ空の端から、段々と朝日が昇る。

暗い海に、朝日が、一筋の線を作る。

その光が、赤司の瞳をきらきらと照らした瞬間に、黛は思わず唇の中で何かを言った。

それが無意識に出た言葉だったせいで、黛は焦ったように唇を手で押さえる。横目で赤司を見ると、彼は何も聞こえていないのか、未だにキラキラとした表情で海を眺めている様子だった。それに少しホツとしたながら、反面何か物足りなさを感じる。

「親に着いたって連絡入れてくるわ」

ため息を吐き、断ってから、近くの公衆電話に十円をいれて電話をする。迎えに来てほしいと伝えれば十五分で着くと告げられた。

「赤司」

名前を呼ぶと、赤司がゆつくりと黛を振り向いた。

寒さのせいで鼻が真っ赤に染まっている。その鼻に手を伸ばして、摘まんでやれば「なにするんですか」と赤司が拗ねるような声で言った。

「さむそうだなと思って」

「黛さんの方が、色が白いんですから、寒そうですね」

「なら俺のもやればいいじゃん」

「……馬鹿なことを」

ふざけた会話の応酬の間もさっきの言葉が、頭をちらつ

いた。

別になんてことは無い、普通の言葉のはずなのに、もう完全に、言うタイミングを失ってしまっている。

きつとこの前赤司の見た恋愛ドラマに多少触発されたのだろうと思うと、更に気恥ずかしさを感じてならなかった。

言うなら今がきつと最後のチャンスなのだろう。

けれど、一瞬でも気恥ずかしいと思ってしまうたら、もう二度と口に出るなかつた。

「あと十五分待っててさ」

「なんか、すみません」

「別にいいよ。タクシー予約しとけばよかつたんだけど、忘れてたし。うちの親、無駄に早起きだから」

言いたいことはそんなことじゃないのに、それでも黛はそのまま本当にそれ以上、何も言えなかつた。僅かな後悔を感じ、それから黛は毎年、その後悔を重ねている。

赤司が社会人になった時も、自分が京都に転勤になった時も、赤司が会社で昇進した時も、それからタイミングはいくらでもあつたはずなのに。

結局、何も言えない儘、時間だけが、五年も過ぎた。

暗い京都の路地を、走り抜けながら、最終バスの時間を腕時計で確認する。あと十分。ギリギリ間に合う時間だ。本当はもつと早く帰る予定だったのに、と思わず舌打ちが零れる。短気だという自覚はあるが、それにしても今日の自分分は、心に僅かばかりの余裕も無い。

イライラするのは、仕事が上手くいかなかったことに対する自己嫌悪が大きな理由を占めているだろう。物事がスケジュール通りにいかないことは嫌いじゃないが、それが納期直前の仕事となると話は別だ。

余裕がなくなつて、視野が狭くなつていたことも、ミスにギリギリまで気付けなかった自分にも腹が立つて仕方なかった。

明日は六時起床予定だが、今から帰つて、用意をして、一体、あと何時間眠ることができるだろうか。

体に残る疲れと、朝が苦手な自分の性質を考えると、ゾツとする。遅刻だけは厳禁だ。さすがに、笑い話にもならないだろう。

急ぐ足は僅かにもたつき、瞬間、僅かに躓いた。危ないひとりでござながら、体勢を立て直しまた走る。汗が頬を伝い、シャツに染みていくのを感じながら、そこま

で必死になつて走っているのに速度の上がないことに苛立った。

けれど、決して足を止めたりはしない。

次が本当に、終バスなのだ。これを逃すと、もうタクシーしか残っていない。

焦りが苛立ちに繋がりが、煙草が吸いたくなるけれど、京都は路上喫煙が禁止なので我慢する。喫煙所に寄っている暇は元よりない。家に帰るまでのお預けである。

—— 明日は、数少ない友人の結婚式だった。

恥ずかしながら、黛は産まれて初めて招待を受けたので、まるで勝手がわからずに、非常に用意に手間取った。

礼服一式、一応はカメラ、ご祝儀、袱紗、等々……。

白いネクタイを、昨日のうちにしておいたことだけが救いだったなど心底思った。きつと帰つてからの疲れた頭では、クローゼットの中からそれを引っ張り出すのも億劫に感じてしまうだろう。

礼服は、一週間前にクリーニングから持ち帰って部屋の端に吊るしてある。新札だって、用意があつたはずだ。大丈夫、大丈夫。脳内で一つ一つ確認しながら、それでも焦りを感じてしまうのは、結局未だに仕事の緊張を引き摺っているせいだろう。

依頼され作成していたプログラムに重大なバグを発見したのが二時間前だ。

それを一時間でなんとか修正し、テストも終え、三十分前にギリギリ納品したばかりだった。まだ終わった気がしないのは、仕方のないことだろう。

タイムカードを押したのは二十分前だ。財布と携帯を掴んで、後は後輩と営業に投げてきた。後輩に「私だって、今日帰ってドラマが見たいのに」と文句を言われたけれど知るもんか。こっちは睡眠時間がかかっているのだ。

当然ながら夕飯も食べていない腹は、エネルギーが足りないとぐうぐうと泣き声を上げている。

もし時間があるのなら、コンビニに行って弁当を二つ買っても余裕で食べられるほどには空腹だったけれど、そんな時間も無い。

コンビニの前を駆け足で通り過ぎると、バス停が見えてくる。

腕時計を見ると、あと一分でバスが来る時間だ。やはり、余裕はないだろう。僅かばかりに残っていたコンビニへの未練を、無理やりに断ち切る。

黛は、バス停に辿りつき、膝に手を着いて、深い息を何度も繰り返した。

胃と肺がきりきりと痛み、思わず手で唇を押さえながら、

何度も何度も深呼吸をする。

少し走っただけで息が上がるのは、運動不足と手放せなくなった煙草のせいだろうか。それでも、煙草はやめられないし、運動をする時間も無いので、仕方ないと、考えることを放棄する。

黛は、腕時計をもう一度確認する。

瞬間、不意に自分の頬をバスの眩しいライトが照らし、こちらのほうに視線を移せば、暗い夜の道路を、バスが一縷の光のように走ってきた。ほっと一息を吐く。間に合ったようだ。これで、タクシーなんて無駄な出費もせずに済む。

定刻通りに来たバスには、疎らに人が乗っている様子だった。

中に居る人たちが、皆一様に疲れた様子で下を向いているのがバスの外からも分かり、その中に入ってしまったら、きっと自分も同じようなものなのだろうなと、自嘲した。

バスが停車し、ライトの明かりが暗く落ちる。

開いたドアに促されるままに黛はバスに乗り込み、十五分程で降りる予定なのに、空いている椅子に座って、目を閉じた。ただただ眠く、そうしてすこぶる最低の気分だった。

窓の外で何かが赤く光り、黛の顔の上を撫でる。

今現在、赤司は東京、黛は京都で生活を送っている。距離にしておよそ五百キロ。所謂遠距離恋愛というやつのも真つただ中だ。最近会ったのは、確か、三ヶ月前。年明けすぐの正月休みの中日に、一緒に初詣に行つて、それ以来、一度も会っていない。赤司の誕生日はクリスマス、少し前にあり、年度末の仕事の忙しい時期に被っているせいで、結局祝えたのも、その正月休みの時だった。

赤司と会つた年始の中日は、世間はまだ、正月ムードが漂つている様子だった。軽快な和楽器のメロディが街中に響いていたし、いつもは人の多い東京も、他の街に比べると人が少なく、掃除する人もいないため街も汚くて、黛にとつてみては、随分と過ごしやすい雰囲気だった。

無駄にオシャレな雰囲気だと逆に歩きにくいのだ。京都なんかはその極みで、未だに四条大宮あたりを歩く時は酷く憂鬱な気持ちに襲われるものだ。

年始は、黛にとつては久々の上京だった。その日は、赤司と会つて食事をしてから、その後京都で一泊して、実家のある離島まで一人で帰る予定を立てていた。赤司に会うのはその時も実に三ヶ月ぶり、どうせ買えと強請られることを見越して、用意してあつた誕生日プレゼントの入つ

た鞆を抱きかかえながら、黛は、京都から東京に着くまでの新幹線の中で、赤司に明治神宮にでも初詣に行こう、連絡を入れた。赤司は案外、イベント事が好きな男だったし、自分も、初詣をすましておきたいという気持ちがあつたのだ。返信はすぐに届いた。

見れば『黛さんは、神田神宮のほうが楽しいのでは？』と書いてあり、見透かされている自身の思考に思わず苦い表情を浮かべる。画面の向こうで笑っている赤司の顔を想像すると、舌打ちが零れた。最近黛がご執心のスマホゲームの聖地がそこなのだけれど、そんな話しただろうか。首を傾げながら、けれど、結局、赤司の言う通り、神田神宮に向かうことに決まり、待ち合わせは秋葉原の駅に決まつた。秋葉原に行くのも、何年振りだろうと黛は思う。

二人とも、東京の大学に通つていたので、迷つたりすることもなくすぐに会うことが出来た。久々に見る赤司は、やはりどうしようもなく綺麗な男だと感じた。

初詣をすぐに済ませて、ファミレスでご飯を食べるとすることが無くなった。別に今更どこに行きたいと言うことも無いので、そのまま赤司を連れてホテルに向かった。ロビーで世間話の続きでもしようと思えば、赤司も泊まりたいと言つたので、急遽、部屋をツインに変更することになつた。

部屋に空きがあつたのは年始早々だつたおかげだろう。値段を優先して、余りいいホテルに予約をしなかつたことを、フロントで手続きをしながら少し後悔した。

安いビジネスホテルの中に、赤司征十郎がいる光景は、少しだけ不思議に見えた。

部屋は三階だと教えられ、エレベーターでそこまで上がつて、部屋を探した。狭い中にくつも部屋があるせいで、見つけるのに少し時間がかかつた。カードキーでドアを開き中に入ると、部屋に染みついた煙草の臭いがした。

自分だけだと気にならないが、赤司がいると多少は気になる。

「喫煙の部屋なんだ」と言い訳のように言えば「黛さんは、吸う人ですからね」と赤司は気にしていないような声で言つた。

案の定、室内はとても狭く、薄暗かつた。荷物を抱えた儘部屋に入り、苦い表情のまま赤司を振り返れば、予想外に彼はにこにここと微笑んでいる様子だつた。少し驚く。顔を顰めていると思つていたので、何となく予想を裏切られたような気分だつた。

「狭いな」

「ええ、ビジネスホテルですから、こんなものじゃないですか」

「お前、こんな部屋で寝たこと無いだろ」

「個人的な旅行ではないですね」

「……個人的じゃない旅行つてどんなんだよ」
「合宿とか」

邪推して低くなつた黛の声に、赤司がくすりと笑い、余裕を返す。黛はその答えに思わず、唸つた。

自分の嫉妬はいつも簡単に見透かされて、黛はその度に何だかどうしようもなく気恥ずかしくなる。二年も早く産まれたのに、自分の方がずつと年上なのに、どうしても、この男にはいつまでたつても勝てる気がしない。

「帰つても良いんだぞ」

気を使つて言えば、赤司は少し拗ねたように唇を尖らせた。それから「お金払つてるんだから、帰りませんよ」と言うと、近くのベットの上に、荷物を下ろした。帰りませんと言う意思表示だろう。その堅いベットで眠れるのだろうか。

「でも本当に狭いですね」

赤司が部屋を見ながら言つた。黛は持つた荷物をどこに置こうかと、少しだけうろろるとする。

「……ビジネスホテルだからな」

「本当に、寝るしか出来ないような部屋ですね」

その声が、妙な色を孕んでいるように聞こえ、妙にくらくらした。離れていた期間が長いせいで、この体たらくだ。すぐに抱きたくなる。

思わず持つていた荷物を床に落として、振り返る。赤司が

視線を黛の方に向けた瞬間に、彼の手を握った。赤司が驚いたように目を見開いた。

彼の宝石のような赤い両眼に、自分のまるで余裕のない表情がうつり込んでいたのを、まるで他人事のように感じながら、そのまま、赤司の体を強く抱きしめた。

徐々に感じる体温だった。

人形のような美しさを惜しみなく垂れ流している癖に、冷たい瞳をしている癖に、代謝が良いのか抱きしめると不思議と赤司の体はいつも熱かった。

自分の方がよっぽど体温が低いと感じる。

いつも、その熱に甘えるように体を近づけるのが好きだった。

腰に手を回し、抱きしめる力を更に強める。

赤司が息を呑む音が、聞こえた。会えない間に積もった話したいことが、一瞬間をよぎる。けれど、彼の匂いを嗅いでしまうと、そんなこと、もうどうでもよくなったし、赤司だっつきつとそうだったのだろうと思った。

そつと背中に戻った赤司の手のひらの熱を感じた瞬間、頭の奥に、情欲の熱を感じた。

まるで溜まりに溜まった熱をお互いの体にぶつけあうように、それから夢中で抱き合った。

終わった後は、正月から何をやっているんだろうとお互いに顔を見合わせながら笑いあった。

言葉通り精根尽き果て、黛の熱を一身に受け止めた赤司はそのうちに深く眠っている。黛はこっそりとベットの抜け出すと、お湯でタオルを濡らして、彼の体を拭いた。

彼の体は汗で濡れて少しべたべたしていて、とても寝にくいだろうと思った。自分は気にならないが、目が覚めた時にそのままでは、赤司があまりにも気の毒だ。

そうして一人で起きていると、沈黙の中に要らないことを考えてしまう。

今度はいつ会えるだろうか。また三ヶ月後なのだろうか。それよりも、先なのだろうか。せめてそれがわかれば、もっと気持ち楽なのに。

口に出せない言葉の数々が、ゆつくりと積もって行くのを感じる。こういう思考はあまりよろしくない。

ため息を吐き、頭をかく。汚れたタオルを、浴槽の中に投げ捨てて、眠って居る赤司の隣に潜り込み、黛も目を閉じたけれど、それでも中々眠ることが出来なかった。

—— 赤司征十郎はとても忙しい男である。

そして、同時に、黛も歳を重ねるごとに、経験と責任に比例して、自由の時間が減り始めているのを感じている。

元々東京のシステム開発会社に就職していて、三年前に京

都に新しく出来る支店の、プログラム部門のグループ長補佐として転勤が決まった。

栄転に聞こえるが、独身だったことが何よりも一番大きな選出理由だということを、黛は誰よりもよく知っていた。三年前に転勤が決まったと伝えた時、赤司は確か「おめでとうございませう」と微笑んでいた。栄転だと喜び、黛の努力と才能を讃えた。

そこには本当に祝福しかなくて、黛は心の中にある僅かなそれ以外の感情を、言葉にする機会を失ってしまった。

この一年間は、三ヶ月ごとにしか会えていない。一年のうちで、たった、四回だけしか会えない恋人同士。それが、赤司と黛だった。

人の一生が平均八十年だとして、けれど自分は不摂生が祟って、例えば七十年だったとして、三十歳が間近に迫った自分の残りの人生はあと四十年だと仮定したときに、自分とはあと何回、赤司に会えるのだろうか。

途方もないことを考えて、僅かに絶望するのは、馬鹿のすることだろう。けれど、一度も言葉にしなかつたけれど、黛は、ずっとそんなことを考えていた。

夢を見ていた。

味噌汁作ってくれる赤司の夢だった。彼の作る味噌汁は、ワカメが入っておらず、その代わりに大量に豆腐が入っているのが常だった。

豆腐から出た水が御味噌の味を薄めてしまうので、何故かいつも味噌をした時より水っぽく出来てしまうのだと赤司は言い訳をしながらそれを食卓に並べている。

いつもそうだ。毎度お決まりの言い訳は、そろそろ聞き飽きたのだけれど「うすあじ」と言えば「だからですね」と少し怒ったようにまた同じ言葉を繰り返す赤司を見るのが、黛は、実はお気に入りだった。

夢の中で黛は、テーブルに座り、食事を用意する赤司をぼんやりと眺めていた。

そうして何故か唐突に「ああ、だから人は結婚するのだからな」と思った。

こんな幸せの塊のような日々が、法律に保障されているなんて、そんなありがたい話はないだろうと。

だから、皆、この幸せの為に、苗字を重ねて、何の根拠もない永遠の愛を、神様に誓うのだろう。

目を覚ますと、何故か、部屋の中に味噌汁の匂いが漂っていた。

起き抜けのはっきりとしない頭で、すんすんと鼻を鳴らし、これは夢の続きだろうと思った。

自分はまだあの優しい夢の中にいて、この味噌汁を作っているのは、きっと赤司なのだ。

赤司がここにいるはずもないのに、と黛は寝返りを打ちながら、今度はハッと息を呑み、急に体を起こした。

一瞬間がくらくらと揺れる。鉄分が足りていないのだろうか。煙草の箱を無意識に片手で探しながら、同時に、ベツトサイドの目覚まし時計に手を伸ばし、それを目の前までもってくる、目を細め、時間を確認した。

時計が五を指し、分針が十二を指している。頭が、夕方か朝か一瞬混乱し、深く息を吐き、枕に顔を埋める。

夕方なはずがないだろうと、冷静になりながら、息を深く吐く。予定よりも一時間も早く目が覚めてしまった。二度寝をしている余裕はないし、諦めて起きるしかないだろう。ベツトから降りた。低血糖が祟り、足元がふわふわと揺れる。

未だに漂う味噌汁の匂いを、その時やつと思ひ出し、違和感を覚える。自分はすっかり目が覚めているのに、味噌汁

の匂いは、まだ部屋の中に確かにある。おかしい。

顔を顰めながら、黛は寢室のドアに手を伸ばした。もしかと言う予感が、頭をよぎる。

瞬間、ノブがひとりで回った。

咄嗟に手を引き、逃げるように一歩下がれば、ドアが勝手に開き、そこから、夢にまで見たあの赤色が顔を覗かせた。

思わず瞬きをする。

まるで夢の続きだと本気で思い、更に瞬きを何度も繰り返す。醒めることは無い。だってこれは、夢ではない。

唐突に、目の前に現れた赤色の瞳は、ゆっくりと幸せそうに細くなりながら「おはようございます」と笑った。

今起きたんですか。二度寝は良いんですか。顔を洗って下さいね。早起きですね。どこかに出かけるんですか。ご飯食べる時間はありますか。

まだ存在が信じられない赤司に、続けざまに尋ねられ、黛は起き抜けの掠れた声で、なんとか返事をしながら、洗面所に向かった。

冷たい水を出して顔をこしこしと洗うと、嫌でも目が覚めてくる。

ついでに歯も磨き、小さなローテーブルの前に戻ると赤司に座るように促された。

何も言わずに従って、出来立ての朝食を目の前にし、一息吐く。

仕事帰りなのか、赤司はスーツを着ている。

背広とネクタイを外し、シャツとズボンだけになっているがそれでも、なんだか気品があるのだから、さすがは赤司征十郎だ。まじまじと眺めていると、視線に気付いたのか、赤司が小首を傾げた。何でもないと首を振れば、彼はエプロンを外しながら、黛の前に腰をおろし、やはり未だにここにことした笑顔を浮かべながら、黛を見た。

「……なんでいるの？」

「今更、それを聞きますか？」

「さっきは、まだ、目が覚めてなかったんだよ」

「でしようね。本当は、あと三時間は起きないだろうって勝手に思っていたので、寝室で音がした時は少し驚きました」

「煙草と目覚まし時計を探してた」

「……起き抜けの煙草は一番よくないですよ」

「へいへい、気を付けます」

食の時間が始まると、二人で声と手を合わせながら言っ、朝食の時間が始まった。

大学の頃は、お互いに東京の学校に通っていて、一時期半同居のようなことをしていたので、これはその時の習慣だった。

それが、未だに抜けないのには自分でも少し驚いている。いただきますなんて、黛は、一人の時は絶対に言わない。自炊だって時間が物凄くある時以外はしなくなってしまうた。

「……味噌汁、やっぱ薄いな」

「塩分控えめなんです……、不味いなら飲まなくても結構ですよ」

「いや。美味しいよ」

あんな夢を見たばかりだから、余計に美味しく感じてしまふ。この水っぽい豆腐の味噌汁が、恋しくて恋しくてならなかったのだと伝えれば、赤司は目を丸くして驚いてくれるだろうか。

けれどそんなことを言える勇気が自分に無いことを黛は知っていた。

何も言わずに味噌汁を飲みきって、お代わりを頼む。赤司は納得できないと言わんばかりの顔で首を傾げて、二杯目を黛に渡した。

「……で、何でいるんだっつー話だけ」

赤司は自分の分の味噌汁をごくりと飲み終えるとゆっくりと箸をおいた。彼は、味噌汁しか飲まないつもりらしい。

何か食べてきたのかもしれない。まだ、朝五時だけだ。

「昨日、こっちで仕事だったんですよ」

「仕事？」

珍しいな、と思う。

赤司グループは大きな組織ではあるけれど、その中にある京都の支社に御曹司が、態々足を運ぶなんてこと、今まではなかったように記憶している。

「そうです。グループ会社の総会議があつたので、父の代理に参加するように呼ばれたんです。俺は座っているだけの会議なので、あまり乗り気ではなかったんですが、久々に京都もいかなと思つて……それに、黛さんにも会いたかつたので」

思わず食事の箸を止め、赤司を見た。

まゆずみさんに、あいたくて。

今、聞き間違えなければ、彼は確かにそう言つたのだろうか。

「俺は今日から三連休を貰つていて、もしかしたら、黛さんもお休みかと思つて、来てしまいました。ほら、貴方、一応カレンダー通りのお休みじゃないですか」

何故か妙に早口に、赤司が言つて、言葉が続けた。

「でも、貴方は今日、どこかへお出かけの予定があるようですね」

赤司がいつこの部屋に来たのか分からないが、米は既に炊いてあつた。朝食を用意して、いつものように昼前に起きた黛と、それを食べるつもりだったのだろうか。

昨日はとんでもない空腹に苦しみながら寝たせいで、赤司

の用意した朝食はどうしようもなく美味しかった。

「……三日も、休みとれたの……?」

「俺にだって休暇は必要ですよ」

「まあ、そりやそうか」

「今日、黛さんが出かけるなんて知らなかつたので、一緒に過ごす気満々だったんですが……というか、貴方どこにでかけるつもりなんですか? こんなに朝早くから」

赤司が怪訝な表情を浮かべた。

今まで見たことも無いようなその表情に思わずひやりと肝が冷える。何もやましいことは無くても疑われると、人は少し焦るようになってくる。

「名古屋」

短く声たえる。赤司が、瞬きをして「名古屋」と繰り返すように言つた。

「何故、名古屋に?」

「友達の結婚式なんだよ」

今度は目を丸くしながら、赤司はばちばちと瞬きをした。

失礼なことを考えられていると分かるので、黛はその細い眉を歪めながら短く舌打ちをした。

「……黛さん、友達いらつしやつたんですか?」

「……絶滅危惧種程度にはな」

「そうですか」

ツボに入ったのか赤司がぐすくすと笑つた。

それを無視しながら、赤司の焼いてくれた目玉焼きをご飯にのせて、黄身を割り、醤油をかけて、黛は朝食を掻っ込んだ。

赤司はそれを眺めながらため息を吐くと、席を立ち、どこから持ってきたのかワイシャツと、部屋にかけてあった礼服、ネクタイを一式持って戻ってきた。

「ちゃんと確認すればよかったですね」

赤司は、いつもの言葉を胸の奥に隠した時の、綺麗な笑みを浮かべながら、スーツカバーから礼服を出しながら言った。

黛はシンクに適当に水をはり、そこに食器を突っ込み「何を？」と返事をする。

「貴方がちゃんと、暇かどうか」

「……まあな」

それは、確かにそうしてくれたほうが助かるけれど。黛はちらりと伺うように赤司を見る。赤司は、黛の白いネクタイの皺を伸ばしながら言葉を続けた。

「気持ち之急いで、仕事が終わってから直ぐに来てしまったて、部屋の前で一瞬、連絡した方がいかもって思ったのですが、それよりも、先に、指が鍵を開けていたので、そのまま中に入ってしまった。眠く無かったので朝ご飯を作っていたのですけれど」

赤司が口にする、妙に言い訳めいた言葉を聞きながら、黛

は寝間着を脱いで、肌着を着て、赤司の持って来たワイシャツを羽織った。

仕事場は私服が許されているので、久々に着るワイシャツだった。

首元一番上までボタンを留めると、やけに息苦しく感じってしまう。

それを指で引つ張り、赤司の渡すスラックスに足を通しながら時計を見ればまだ朝の六時だった。

本来なら、今、目を覚ましている予定だ。

「明日の朝、帰ってくる予定なんだけど」

赤司は黛の脱いだ寝間着を拾い、自分の着ていたエプロンと一緒に手に持ちながら振り返り、首を傾げた。

「……誰がですか？」

「俺」

「まゆずみさんが」

赤司の用意してくれた礼服のネクタイを首に通して、結び方を思い出しながら、鏡を見る。一向に思い出せない。高校の時は日常的に結んでいたのに、ブランドがあるとすぐこれだ。もう歳だ。ぼんやりと考え、ちらりと赤司を鏡越しに見れば、赤司はブランドの洗濯機に、それら一式を持って行くのを止めたのか、制止したまま、黛の背中を眺めている様子だった。

何となく気まずかった。

自分らしくない事を、今から言おうとしていることは、黨が一番分かっている。

「……お前は、明後日まで休みなんだよな？」

ネクタイの結び方が、分からずに、首にかかったまま適当にそれを揺らす。赤司に話す声が上ずっているのは、他の事を考えながら話しているからだ。黨は自分に言い聞かせた。

あくまで、そのせいだ。

それ以外に、理由は無い。

「ええ、休みです。何か重大な問題が起きない限りは、何も連絡を入れないようにと、部下には伝えてあります」

「なら、ここに居たら？」

お前が、もしも、それでいいなら、この部屋に居ればいい。

そう続くはずの言葉は、背後から急に伸ばされた二本の腕に驚いたせいで、声になることは無かった。

乱暴でも、無理やりでもない、自然な動作で、自分の体は自然と後ろに引かれる。

気付いた時には腕の前で白い腕が組まれていて、背中にびつたりと、良く知った体温が重なっていることを知る。

黨は僅かに動揺し、体勢を後ろに崩したけれど、自分よりも少し小さな男の体は、それを危なげもなく支えてみせた。

それが酷く恥ずかしく、それから妙に心地よく感じる。ほだされていると感じるのはこういう時だ。

否、これは惚れていると言うべきなのか。

「……いいんですか」

背後で赤司が言った。

「いいよ。別に、お前に鍵渡してらんだし、この部屋を好きに使っても良いって意味のつもりだし」

「……わかりました」

赤司の声が少しだけ震えているように聞こえ、驚いた。

思わず振り返ろうとすれば、赤司はそれを許さずに「前を向いてください」と言つて、黨の背中にさらに体を密着させた。絶対にこつちを向くなという意思を感じる。彼が、意固地になると面倒なので、黨はため息を吐き従った。

正面を向き直せば、首に絡まった彼の手がそつと黨のネクタイに伸びる。黨の体がびくりとゆれば、赤司はくすりと笑つて見せた。少し恥ずかしい。

ネクタイを上手く結べない黨を見かねたのか、赤司はそれをやすやすと結んでみせる。さすが、名家の御曹司さまは違う。

「……早く帰ってくるから」

小さな声でそう言うと、赤司は背中で「はい」と同じような小さな声で返事をした。

同時に、ネクタイを結び終わった手が離れ、赤司の両手は黨の背中をぼんと叩く。

終わりましたよと言う合図だろう。

僅かな痛みと同時に、背中に密着していた彼の体はそっと離れた。

昨日まで傍になんて居なかった体温が離れていくのを、もう既に寂しいと感じている自分に、気付く。

「なら、お言葉に甘えて、この部屋で待っています」

黛が鏡を見ながらネクタイをそっと指で撫でていると、赤司は、黛の背中にそう言つて、寝室から出て行った。

返事はもう、必要ないのだろう。

寝室のドアが閉まった音を聞いてから振り返り、黛は少しだけ深い息を吐いた。

生活音が赤司の後を着いて行つたかのように消え、刹那、部屋の中がしんと静まり返つたような気がして、それはやはりどうしようもなく寂しいもののように思った。

黛は、ベットサイドに置いてある煙草の箱を掴むと、思い出したように、ポケットにしまった。一本吸うのは、もう少し後からでも良いだろう。

寝室から出ると、テレビをつけた。

そうして、平素日常から、そうしているように、インスタントコーヒーの粉を適当にマグカップに入れながら、ベランダの赤司に視線を送った。

洗濯機をまわしている赤司は、顔を上げて、マグカップに気付いたのか、こくりと頷き「欲しいです」と意思表示をする。視線に気付く赤司も赤司だが、彼の言いたいことが

分かってしまう自分も自分だなどと、黛は赤司の分は少しだけ薄目のコーヒーを準備した。